

ごく下層で湿潤不安定時に出現する低高度対流性雲の典型的なものは、冬期季節風時に出現するものである。暖候期にも同様な低高度対流性雲が出現する場合がある。この場合、層状雲との混合型として、特に東北地方太平洋側地域に大雨をもたらすことも少なくない。ここでは、特に対流性雲が層状雲と混在しないで単独で出現する場合について、主としてレーダー観測や雨量観測をもとにして、その特徴的なことを述べる。

8. 藤原美幸・柳瀬利子（気研台風）：尾鷲の対流性降雨の際の雨滴分布とレーダー波減衰について（20分）

尾鷲測候所において昭和46・47年にドップラレーダー等とのレーダー観測と同じに雨滴観測を行なった。対流雲の場合の雨滴分布は、特徴的な対流性強しゅう雨型を示しこのような対流雲による電波の減衰を調べるためこの雨滴分布を用いて波長 5.6, 3.2 cm における減衰係数の計算を行なった。

9. 椎野純一（気研台風）：簡単な雲物理過程を考慮した飽和湿潤大気中における浅い一次元対流モデル（20分）

柳沢・青柳らによる尾鷲の雨の RHI レーダー観測によると、豪雨時尾鷲付近の上空にはエコー高度 7~8 km の対流雲とは別に 3~4 km の割合背の低い対流雲が存

在している。藤原らは低い雲からの豪雨の発生機構に関する雲物理的研究の中で、この低い対流雲中での雨滴の補足成長のメカニズムが重要な役を演じていることを指摘した。ここでは飽和湿潤大気中において、上記のような低い対流雲の中でどの程度の上昇流、雲水量等が期待されるか、エントレメントや雲物理過程を考慮した定常一次元対流モデル（JET モデル）によって数値的にシミュレートした結果を報告する。

10. 榊原 均（名古屋大）：地形による降雨の増幅作用（解析と数値実験）（20分）

降水量の分布は山によって大きく影響されることが知られている。山が存在する時の大気の状態による降雨量分布の変化を調べるため、大台ヶ原と尾鷲の雨量を比較し、潮岬高層データから得られる諸量との関連について述べる。さらにこの実験では山を熱及び水蒸気の供給源としては考慮せず、気流に対する障害物とみて、下層での強制上昇、中層でのシアーの変化などの与える影響に注目し数値実験を行なった。

11. 気象レーダー利用研究会（気象庁）：日本のレーダー文献から（50分）

日本におけるレーダー関係の文献を研究会員が分類し、内容をサーベイした。そこから出てきた各種問題点、特長、将来展望や計画についてのべる。

メゾ気象に関する研究発表および検討会

I. 関西支部近畿地区月例会

日時 昭和 48 年 2 月 20 日 11 時—17 時
場所 大阪管区気象台

- メゾ気象研究グループの活動概要
京大防災研 中島暢太郎
- 日本海上のレーダーエコー解析
福井地方気 清水 喜允
- 局地前線とそれに伴う降雪
彦根地方気 滝野 一郎
- 昭和 46 年 1 月 4 日～5 日の寒冷渦と小低気圧の総観解析
舞鶴海洋気 和田 徳弘
- 昭和 46 年 1 月 4 日～5 日のレーダエコー解析
松江地方気 田村 信之
- 近畿地方のメゾ解析 奈良地方気 大西 慶市

7. 昭和 47 年 7 月高知豪雨のメゾ解析
京大防災研 枝川 尚資

8. メゾ気象擾乱に関する研究の展望
京大理 浅井 富雄

II. 関西支部四国地区月例会

日時 昭和 48 年 2 月 28 日 13 時—17 時
" 3 月 1 日 9 時 30 分—12 時
場所 高松地方気象台

2 月 28 日

- 昭和 47 年 7 月豪雨の解析—繁藤付近の豪雨機構の考察
高知地方気 篠宮 弘
- 昭和 47 年 7 月豪雨のレーダー解析
室戸測 浅田 暢彦
- 昭和 47 年 9 月 8 日～9 日の愛媛県今治地方の局

- 地豪雨 松山地方気 大成 公道 神戸海洋気 菊田 一郎
4. 昭和47年7月4日～6日の四国地方南部の大雨とレーダーエコーについて 高松地方気 出水 雅善
5. 昭和47年6月7日～8日朝の四国地方の大雨について 高松地方気 宮本 一夫
6. 昭和47年7月4日～6日早朝の四国南部の大雨について 高松地方気 桐山 一陽
7. 愛媛県の霧について 松山地方気 大島 正三
8. 予報的見地からみた内海東部の濃霧について
9. 備讃瀬戸に濃霧が発生したときのメゾ解析について 高松地方気 土居 猛浩
10. 備讃瀬戸の霧発生機構の予備調査 高松地方気 塩田 輝也

3月1日

- 特別講演 “メゾ気象—特に対流を中心として”
京大理 浅井 富雄
- 検 討 会 “メゾ気象に関する今後の研究の進め方”

日本気象学会誌 気象集誌

第II輯 第50巻 第6号 1972年12月

- 笹 森 享：熱放射によるエネルギー損失を考慮した大気の運動の一解析……………505—518
- 楠 田 信・沢 田 竜 吉：富士山頂における気圧の潮汐振動……………519—524
- 浅 井 富 雄：流れの早さと向きが高さと共に変るシャー流の熱的不安定性……………525—532
- R. M. エンドリッヒ・R. L. マンクーツ：熱帯地方における気象衛星の資料と通常
の観測資料を結びつけるための数値的技術の応用……………533—541
- I. I. シェル：北太平洋北西部における大規模な海水状況・海面水温のアノマリー
の日本北部・ソ連極東域の天候におよぼす影響……………542—557
- 二 宮 洸 三・秋 山 孝 子：広域合成レーダーエコー天気図によってみられる梅雨
前線帯の中間規模エコー・クラスター……………558—569
- 近 藤 純 正：大気・海洋間の長期平均フラックスの計算に微気象学的輸送係数の
適用について……………570—576
- 梶 川 正 弘：雪結晶の落下速度の観測……………577—584

要 報 と 質 疑

- I. セギナー：植物群落内部の葉面密度と混合距離の相互関係 ……………585—587

第50巻(昭和47年)目次……………